

仮面ライダービルド&HUGっとプリキュア 輝く未来をビルドせよ！

ブラッド族族長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

火星で発見されたパンドラボックスが引き起こした
スカイウォールの惨劇から10年

我が国は東都、西都、北都の三つに別れた。

そして、輝く未来を奪おうとするクライアス社の魔の手を前に仮面ライダーとプリキュアが立ち上がる！

目次

プロローグ	1
第1話 ベストマッチな者たち	
part A	6
part B	13
part C	19
第2話 輝きのデストロイヤー	
part A	34

プロローグ

10年前…

日本の有人探査機『極』が初めて火星の着陸に成功した。そこで発見されたのが謎の箱、『パンドラボックス』だった。

「それが悪夢の始まり。『スカイウォールの惨劇』…あの日の恐怖は多くの人々の記憶に刻まれたことでしょう。」

そうやって若い青年、氷室^{ひむろ}嚙^{ごうじ}滋は窓から映る巨大な壁、『スカイウォール』を見る。

「火星探査機の帰還セレモニーで、謎の光が放出され、突如巨大な壁が出現した。その壁、スカイウォールは日本を3つに分けて、それぞれに首都が生まれた。社会福祉の充実を図る北都。経済の復興を目指す西都。従来の平和主義を掲げる東都。互いに対立を深めこの国はバラバラとなった。」

スカイウォールを見ながら嚙滋は顎を掻きながら言葉を続ける。

「今がチャンスとばかりに諸外国はそれぞれの首都を吸収しようと目論んでいる。その前になんとしても…あの箱の謎を解明しなければならぬ。」

そうやって嚙滋は外とは逆方向にある窓のほうに歩きだし、下にある大きな金庫に目を向けるそこには数人の研究員と警備員がいた。

その時、一人の少年が金庫に足早に近づいていた。

「おおおおお！これがパンドラボックス…！一体どんな素材で作られてるんだあ〜！」

少年は髪をピョコンと跳ねあげながら興奮した様子で小窓から見えるパンドラボックスを見ていた。

「この成分はなんですか!?!教えてもらえませんか!?!」

近くにいた警備員や研究員たちに少年はそう聞き回っていた。
その様子を見ていた嚙滋の近くに眼鏡をかけた青年、内海瑛が歩み寄る。

「研究員の中途採用はないかと訪ねてきました…：試しにウチのテストを受けさせたところ、全問正解でした」

「あの難しいテストをねえ…」

「ですが、その後彼はまだ中学生だということがわかりましたので、卒業までは採用できないということに…」

「そうだったのか？残念だが仕方がないか…」

「あの…」

顎をいじりながら嚙滋は内海の言葉に頷く。

そこにさきほどまで嚙滋の話を聞いていた女性、増子茉莉が嚙滋に歩み寄る。

「最後に、『仮面ライダー』をどう思われますか？」

「『仮面ライダー』？」

「はい。最近東都の街では、スマッシュと呼ばれる未確認生命体に市民が襲われる事件が相次いでいますよね。それを救っているのが仮面ライダーという謎のヒーローだと言われています。」

そう言って増子は二枚の写真を見せた。一枚には白いトゲが特徴的なボディの怪人が写っていた。そしてもう一枚には塔の形をしていて胸には社員証と思われるものをつけている怪物が写っていた。

「他にも数日前、ラヴェニール学園では謎の怪物が現れ、それを倒したと言われている『プリキュア』という存在も確認されているようなのですが…」

「それは興味深い。では、隣のホテルでその二人のヒーローについて朝まで語り明かそうか」

そう言って嚙滋は彼女の肩に手を回し、隣のホテルまで行こうとしていた。途中までついでいこうとしていた増子だが嚙滋の言葉の意味を理解したのか足を止めて驚きの声を上げた。

「……はあ!？」

*

―夜―

「あのエロ補佐官、何考えてんのよ!」

増子は囁きの誘いを断り、苛立ちを感じながら編集長に報告の電話をしていた。

「えっ?今からホテルに行けってどういう意味ですか?編集長!!」

そうやって電話の向こうで話をしている編集長に怒鳴ると通話を切り、スマホをバッグに片付けながら歩いていると誰かとぶつかり倒れてしまった。

「すみません…」

謝りながらぶつかった相手の方を見ると、そこにいたのはさきほど自分が囁きに見せていた写真に写っていたものとそっくりの怪人、ニードルスマツシュユがいた。

「スマツシュユ…!？」

驚きながらも、増子はすぐさまスマホをバッグから取り出し、写真に収めようとした

「フンッ!」

「うっ…!」

だがニードルスマツシユはそれを手で払い、その衝撃で増子は地面に倒される。

ニードルスマツシユはゆっくりと彼女に近づき、その手の鋭い爪を突き刺そうとしたその時、

「ちよつと待った」

何者かがその手を掴み彼女から引き剥がした。それは体が半分色が赤と青で右側の顔には戦車、左側には兎を模したようなものであった。その戦士は手に持つ切っ先がドリルのような武器を振り回しニードルスマツシユを切り伏せる。そうすると戦士は赤いボトルのようなものを武器の差し込み口に装填する。

《Ready go!》

《ボルテック ブレイク!》

機械音と共にドリルの部分が回転を始めた。ニードルスマツシユは戦士をその爪で貫こうと走り出す。

戦士はそれを待っていたようにドリルの武器でニードルスマツシユを切りつけた。

「グアアアッ!」

ニードルスマツシユは断末魔をあげながら爆発と共に倒れ伏した。戦士は空のボトルを取り出した。ニードルスマツシユからは粒子のようなものが出て来て、戦士が持つ空のボトルへと集約されていた。粒子がボトルに集まりきると、ニードルスマツシユは姿が変わり、そこには一人の男が倒れていた。

「よしっ!」

そう言って戦士はボトルの詮を閉めた。

そこでさきほどまで倒れていた増子が気がつき、朦朧とする意識の中、戦士の姿をはつきりと見据え呟く。

「仮面ライダー……」

それは戦士、仮面ライダービルドが伝説の戦士、プリキュアと出会う少し前の出来事である。

第1話 ベストマッチな者たち

part A

ふと周りを見ると、自分は水槽のような機械の中に入れられていた。四肢を拘束され、身動きが取れず口には酸素マスクのようなものを着けられ何かを流し込まれていた。必死に抜け出そうとしても動けない。

そんな様子をガラスの向こうから、防護服で体を覆ってガスマスクで顔もわからない人間が何人も自分の周りで機材をいじっている。研究員らしき者たちと、その向こうにコウモリのような仮面越しにケタケタと笑っている男が大きな椅子でふんぞり返りながらこちらを見ている。

そこで俺、きりさきせんと桐崎戦兔の意識が途切れた――

*

トーストが焼けた音と共に少年、桐崎戦兔は目を覚ました。

ふと鏡で自分の顔を見ると、その顔に落書きがされていることに驚いた。

「はあ…最悪だ」

ため息をつきながら戦兔は顔の落書きを落とそうとしたその時、爆発音が部屋に響く。

「おっ！

」

その方向に行くと、そこには巨大な機械があり、大きな扉の横にあ

る電子レンジの扉に似た物を開けるとそこには針鼠の形がある白いボトルが入っていた。

「最ツ高だ！」

先ほどの落ち込み具合とは打って変わって、戦兔は頭を掻き、髪の毛をピヨコンと跳ねながらボトルを手に取り、興奮冷めやらぬ様子だった。

すると扉のほうから左腕に金色のバングルをつけた一人の少女が出てきた。

「はあ…」

「はいお疲れ！」

疲れたような表情を浮かべる少女に戦兔は労うようにハイタッチをしようとするが少女はさらりと避けた。

戦兔はそんな少女、石動美哥いするぎみかに先ほどのボトルを持って尋ねる。

「これ何？ハリネズミ？」

「知らないし…興味ないし…疲れたし…バイト代ほしいし…眠いし」

「今度はどんな技が使えんだろ？早く試したい…！」

眠たげな表情で言う美哥を余所に、戦兔の興味は白いボトル、ハリネズミフルボトルに向いていた。

そして先ほどの機械のほうに歩き出す。

「でも、やっぱ最高だな！俺の発明品！ただの怪物の成分がビルドに使えるパワーアップアイテムになっちゃうんだからな」

「でたよ……」

自分の発明品のことを語りだした戦兔に美哥はあきれながらベッドの方へゆっくり向かった。

「もちろん美哥の能力あってこそだけどさ。それを最大限に生かした俺の技術はもつと評価されてもいいと…」

戦兔が美哥の方を見ると、美哥はいびきをあげながらベッドでグースカと寝ていた。

「にやろ……」

そう言う間、戦兔は寝ている間に落書きされた仕返しに寝ている美

哥の顔に数式の落書きをしたあと、学園の制服に着替え、階段を昇っていった。

*

喫茶店「n a s c i t a」

はぐくみ市の小道に構える喫茶店だ。

そこで掃除をしていた男性、石動惣呀いするぎそうがが冷蔵庫のほうを見ると、その扉から戦兔が出てきた。さきほどの実験室兼秘密基地はここ n a s c i t a の冷蔵庫から地下に繋がっているのだ。

「ボンジョルノ！戦兔くん！」

「おはようマスター。これ、昨日の収穫」

そう言つて戦兔は惣呀にハリネズミフルボトルを見せた。

「ブラボー！さすがは我が娘！」

まるでハリネズミフルボトルを愛する我が子のように掴む惣呀の様子に戦兔は苦笑いをしていた。そして二人は店のカウンターに腰を下ろす。

「でどうよ？少しは、思い出したのかよ？」

「なにが？」

「記憶だよ！お前の十何年間のキ・オ・ク！」

そう言つて惣呀は戦兔に指差した。戦兔は今年で14歳になるが、1年前より前の記憶は失われているのだ。

その事を聞かれて、戦兔は夢の中で見たことを話した。

「ガスマスクの科学者、人体実験、コウモリ男……以上」

「なんだ進展なしかあ……お前そのコウモリ男探すために、ビルドやつてるんだろ！」

惣呀は戦兔の言葉にあきれながら肩を叩き席を立った。

「しやうがないだろ！スマッシュにされた奴らは元に戻っても、なんも覚えてないんだから」

「言つとくがな。1年間のお前の家賃相当たまってぞ」

惣呀は請求書の束を戦兔の前に起きながら言つた。戦兔は請求書

を捲り確認した。

「何家賃って!? そんなの発生してんの!?」

「当たり前だろう? 記憶喪失の男の子を無償で寝泊まりさせてやるほど、オレはお人好しじゃないの」

そう言った惣呀の言葉に戦兎は昨日東都政府に行かされたことを思い返した。

「まさか…東都の研究所に就職させようとしたのも!?」

「うまくいけばよかったのになあ…さすがに中学生に就職させるのは無理があつたか。ま、お前が中学を卒業したらバッチリ働いて返してもらおうよ」

「最悪だなアンタ……」

そんな惣呀の言葉に戦兎はため息をして呟いた。ふと陣弩が時計を見て口を開いた。

「今日転校初日だろ? のんびりしてていいのか?」

「あ、やばー!」

遅刻してしまう! と、急いで走りだそうとした戦兎だが扉の前で一旦足を止め、惣呀の方に向き直る。

「…と、お急ぎのあなたへ。そんな時には…これ」

そう言いながら取り出したのは、少し大きいスマートフォンと黄色いライオンの顔が描かれたボトル、ライオンフルボトルであった。

「何? 遅刻の連絡?」

「そうそうそうそう。もしもし…なわけねえだろ!」

ノリツツコミをしつつ、戦兎はライオンフルボトルを大きいスマホ、ビルドフォンの差し込み口に指した。

《ビルドチェンジ!》

電子音と共にビルドフォンは大きくなり、1つのバイク、マシンビルダーへと姿を変えていた。

「おおっ！バイクに変形した!？」

「なっ！すごいでしょ？最高でしょ？天才でしょ？」

そう言つてパネルのボタンを押すとヘルメットが出現し、それを被ると戦兎はマシンビルダーに乗る。

「さあいざ、ラヴェニール学園へレッツ…！」

エンジンをかけようとした戦兎の手を惣呀はすぐさま止めた。

「ゴー！しないでよ。ここ、店の中だから」

「あつ……」

惣呀の言葉に戦兎は思い出したように周りを見てマシンビルダーに一旦降りる。

「それと、さすがに中学生がバイク乗ってたらマズいから、見つからないようにしろよ」

「わかってるって」

戦兎はマシンビルダーを外に出して学校の近くへと走らせた。

*

—ラヴェニール学園—

その学園の中等部の2年生のクラスではある話で盛り上がっていた。
た。

「聞いた？今日転校生が来るんだって！」

「しかも、男の子らしいよー！」

黄緑のカーデイガンを着た眼鏡っ娘の十倉^{とくら}じゅんなど、ツーサイドアップの髪型に腰にカーデイガンを巻いている少女、百井^{ももい}あきは目の

前の2人の女の子に話しかけた。

1人は濃いピンク色に前髪がパツツンが特徴の女の子、野乃はな、もう1人は青いロングヘアが特徴の女の子、薬師寺さあやである。

「そうなの？」

「はなちゃんが転校してきて少ししか経ってないのに…」

「だよ。しかもその転校生、14才らしいよ」

「14才？それじゃ本当は3年生なんじゃ…」

はなの言葉に、じゅんなは眼鏡を光らせて答えた。

「そう。もしかしたら前の学校で何か問題を起こして停学…とか」

「もしそうならウチのクラス、万丈龍斗ばんじょうりゅうとに続く不良生徒が増えちゃうよ」

「万丈龍斗？」

じゅんなとあきが嘆いていると、はなは聞きなれない名前に耳をかしげた。

その疑問に答えたのはさあやであった。

「ウチのクラスメイトんだけど、はなちゃんが転校してくる1ヶ月前から学校にきてないの」

「そうなの？病気かなにかなのかな…」

まだ見ぬクラスメイトを心配するはなに、じゅんなとあきはすぐに否定した。

「いやないない。あの万丈に限って」

「噂じゃ怪しい人たちとつるんでるって話もあるんだよ」

「そうなのかな…」

そう言っではなは俯いて考える。そうしていると、ホームルームのチャイムが鳴り、皆が席につくと担任の内富士先生うちふじが入ってくる。

「皆さん、今日は転校生を紹介します」

そう言っつて内富士先生は教室の扉の向こうにいる人物を呼ぶ。そこから入ってきたのは、戦兎であった。

「桐崎戦兎です。以後、よろしく」

これが仮面ライダービルドである桐崎戦兎と、プリキュアであるは

私たちの最初の出会いである。

*

その頃――

――とある下水道――

「はあ…はあ…！」

1人の少年が上半身は裸で下は白いズボンを履いて下水道の中を走っていた。まるで何かから逃げるように…

「クソッ…！捕まってたまるか…！」

その少年、万丈龍斗が桐崎戦兔と出会うのは間もなくである。

Part B

転校生のためか戦兎はクラスメイトたちから質問攻めにあっていた。

「桐崎君、前はどこの学校だったの？」

「私たちと1つ年上の14みたいだけど、何かやらかしたのか!？」
（まあわかつてはいたけど。どうしたもんかなあ…）

みんなの質問に戦兎は口をつぐむ。自分が1年より前の記憶がないため、前の自分はどうだったのかを話せない。かといって記憶喪失ということはあまりおっぴらには喋れない。そんな戦兎を見てなのか、はなとさあやは戦兎たちの間に入った。

「ほら、みんな。桐崎君困ってるよ」

「そうだよ。そんなに一辺に聞かれたら答えられないよ」

二人の言葉に、先ほどまで質問していたクラスメイトたちは落ち着きを見せた。

「言われてみれば…」

「悪いな桐崎。困らせちゃって」

そう言ってクラスメイトたちは蜘蛛の子を散らすように離れた。

「ありがとう。たしか…野々さんと、薬師寺さんだっけ？」

「いいよ。わたしもこの前転校してきたばかりだから、なんか親近感沸いたんだ」

「困ったときはお互い様だよ。これから同じクラスメイトになるんだから」

そう言っではなとさあやは笑いかける。そんなに二人の言葉に戦兎は感謝する。

ふと、はなは戦兎の顔をジッと見る。

「え、どうしたの？俺の顔に何かついてる？」

「桐崎くんって…前にわたしとどこかで会ってない？」

はなの唐突な言葉に戦兎はえっ？と驚きの表情を浮かべた。

もしかしたら1年前より前の自分を知っているのではないかと思っただのだ。

「覚えはないけど…どこかで会ったかい？」

「うーん…やっぱり気のせいだったかも。ごめんね…」

そう言って謝るはな。その表情は何故か悲しげなものだった。それにさあやと戦兎は気づけずにいた。

*

授業が終わり、戦兎は *nascita* に帰ろうとしたその時、ビルドフォンから着信音が鳴った。画面には知らない電話番号が表示されていた。その覚えのない番号に怪しいと思いつつも戦兎は出た。

「もしもし?」

『昨日ぶりかな? 桐崎戦兎くん』

「あなたは?」

『東都政府首相補佐官の氷室嚙滋だ』

東都政府首相補佐官。その意外な人物からの連絡に、戦兎は驚きの表情を浮かべた。

「東都政府の方がなんで…」

『詳しい話はこちらに来てからでもいいかな? 学校の前に迎えの車を回してある』

電話越しの嚙滋の言葉に戦兎は窓の外を見ると、校門の前に東都のマークがついた黒塗りの車が来ていた。

これはもう行くしかないのだと戦兎は思った。

「…わかりました。これから向かいます」

『話が早くて助かるよ。では後程…』

そう言い残し嚙滋からの電話は切られた。

戦兎が昇降口に行くと、生徒たちは校門の前に来ている東都政府の車に驚いていた。

その様子を見ながら、戦兎は昇降口を出て車の前に立った。

そこには眼鏡をかけた政府の服を着ている青年、内海がいた。

「待っていたよ。さあ乗りましたまえ」

「…どうも」

軽い会話をしつつ、二人は車に乗り、東都政府へと向かった。

その様子を見ていたはなたちは驚いていた。

「なんで桐崎くんが東都政府の人と…?」

「もしかして、東都政府に目を付けられるようなことをした、とか?」

「やっぱり彼も万丈みたいなお問題児だったのかな?」

じゅんなどあきの言葉をよそに、はなは走っていく車を見つめていた。

*

—東都先端物質学研究所—

ここでは先ほど戦兎と電話をしていた氷室嚙滋が待っていた。

「ようこそ、桐崎戦兎くん」

そうやって嚙滋は戦兎に研究所の中へ案内した。

「それで俺に何の用でしょうか?」

「その内海から聞いたよ。うちのテスト、全問解いたそうじゃないか。素晴らしい」

「ありがとうございます。でも中学生じゃあ中途採用は無理って昨日言われたんですけど…」

「ならば、バイトとして雇わせてもらいたい。君の在籍してる学園には私が話をつけておこう」

嚙滋の言葉に、戦兎は目を見開く。いくら東都政府の首相補佐官でもやっていいことなのかと。

「でもそれは…」

「もちろんそれなりに給料は出す。学生である以上勉学を優先してくられても構わない。君が来れる時に来てくれればいい。悪い話ではないだろ?」

「たしかに悪い話じゃないんですけど…なんで俺なんかを?」

「我が国は君のような逸材を欲している。そこに年齢などは関係ない、と私は思っている」

「そう言われると、なんか照れますね」

そう言つて戦兎は照れ臭そうに頬をかく。

「それに、君と同じくらいの歳の少年が前にここにいた。1年前事故で亡くなつたがね」

「えっ、その人つて一体…?」

そんな戦兎をよそに噛滋はパンドラボックスが保管されている場所にたどり着く。

「まあそんなことより、君にやってもらいたいのはこのパンドラボックスの解析だ。この中には、核より強大なエネルギー物質があると言われている」

そう言つて話を変えた噛滋。戦兎もそれ以上は聞かないほうがいいだろうと思い、噛滋の話についていく。

「地球より遥かに優れた文明が存在してたつてことですよね?」

「その通りだ。そしてこの箱の強大なエネルギーを巡り対立し、国は3つに分かれた」

戦兎にパンドラボックスの話をしていると、噛滋のスマホから振動音が鳴つた。「すまない」と戦兎に言い、噛滋は電話に出た。

「私だ。………わかつた。今から向かう」

そう言い残し、噛滋は電話を切り、戦兎に向き直る。

「申し訳ない。火急の用が出来てしまった。今日のところはこれで失礼する」

「はいわかりました」

「では、期待してるよ。おい、彼を送つてやつてくれ」

近くにいた政府の人間にそう言い残し、噛滋は内海を連れて歩いていった。

戦兎も政府の人に連れられる途中ビルドフォンから着信音が鳴つた。相手はマスターの惣呀からだつた。

「すいません。歩いて帰るんで大丈夫です」

「そうか。気をつけて帰るんだぞ」

政府の人にそう断りをいれ、戦兎は足早に研究所を出た。その後、戦兎は惣呀からの電話に出た。

「もしもしマスター。どうしたの？」

『スマッシュらしき怪物が現れたって情報が入った』

「場所は？」

『いま場所のデータを送る』

惣呀からスマッシュらしき怪物が現れた場所のデータを受けとると、戦兎は研究所から離れ、人気のない場所でビルドフォンを起動しマシンビルダーに変形させた。

『それと、そのスマッシュらしき怪物に人間が襲われてるみたいだ。センサーに反応はないが、スマッシュになる前の可能性が高い。そいつも保護してやってくれ』

「わかった」

マシンビルダーを走らせ、戦兎は目的の場所へと向かった。

*

—その頃—

はなとさあやはある建物に来ていた。

大きな樹と一緒に建っているそこで、二人はある赤ちゃんのお世話をしていた。

「はーぎゅー。はーぎゅー」

その赤ちゃんの名前は”はぐたん”。

空から突然現れたというこの赤ちゃんを、未来を奪おうとする敵、”クライアス社”から守るのが、彼女たち”プリキユア”の使命でもある。

「はあ……」

「どうしたの、はなちゃん？」

「なんや、今日は偉い元気ないな」

ため息をついたはなに、さあやと赤髪の青年、ハリーは心配する。

「うんうん、なんでもないよ！あはは」

「嘘つけ。普段のお前見とったらわかるわ」

「はなちゃん、桐崎くんが来てからおかしいよ」

笑ってごまかそうとするはなをさあとハリーは諭す。

笑っていたはなの表情が少し暗くなった。

「実はね…桐崎くんがどこことなく、前の学校にいた男の子と似ているんだ」

「もしかして失恋相手とかか?」

「そんなんじゃないよ。ただ、その男の子……」

ハリーの言葉を否定しながら、はなは言葉を続けた。

「1年前、東都政府の研究所にいった後、事故で亡くなったんだ……」

「そうだったのね……」

「なんか酷な話してもうたな」

その後しばらく沈黙が3人の周りを包んだ。

はぐたんも自然と泣きそうな表情になっていた。

「はぎゅ〜……」

「ごめんねはぐたん……。はい!もうこの話は御仕舞い!」

はぐたんの顔を見たはなは気持ちを切り替えて笑いかける。

その時、ある場所の空が暗闇の黒く染まった。その空を見たはなたちはずぐに外に出た。

「あれは……!」

「クライアス社や!」

「行こう、さあやちゃん!」

「うん!」

はなとさあやは黒くなった空の方向へと走り出す。

ハリーもはぐたんを抱き抱え、遅れて着いていった。

その方向は、今戦兔が向かおうとしてる場所でもあった。

Part C

暗雲が立ち込めるスカイウォールの近くの工場では少年、万丈龍斗が怪物に襲われていた。

「うわああー！」

「オシマイダーー！」

その怪物の腕はフォークリフトの爪のような形状をしており、特徴的なのは胸に社員証らしきものをぶら下げている。それはクライアス社が使役する怪物、”オシマイダー”である。その近くには若者風な出で立ちをした褐色肌の青年、クライアス社”あざばぶ支社”の係長、チャラリートがいた。

「いい加減、大人しく捕まれよ。万丈龍斗ちゃんよお！」

「ふざけんな！またモルモットにされてたまるか！」

「ウツザ。オシマイダー！痛い目見せてやれ！」

「オシマイダーー！」

チャラリートの言葉に、オシマイダーは鋭い爪を持った両腕を龍斗に向けて振り下ろす。

龍斗はそれをすれすれでかわし続ける。

「もういい加減諦めてくんない？オレちゃんもリストルさんにいきなりお前を捕まえろって追加の仕事押し付けられて困ってるの。わかる？！」

「テメエの事情なんか知るかよー！」

面倒くさそうに言うチャラリートに対して龍斗は言い返しながらオシマイダーに向かって殴り掛かる。

しかしオシマイダーは怯むこともなく、まるで蚊に刺されたような反応をするだけだった。

「ウソだろ…？！」

「プリキュアでもあるまいし、普通の人間がオシマイダーに勝てるわけないっしょー！」

「オシマイダーアー！」

自分のパンチが効いていないことに驚いている龍斗をオシマイ

ダーは横から腕で払い吹き飛ばした。

龍斗は工場の壁に激突する。口を切ってしまったのか、口元から血を流す。

「クソ……ここまで……なのかよ……」

「手間かけさせてくれちゃって……うん？何の音だ？」

壁に叩き付けられ、動かなくなつた龍斗をチャラリートは回収しようとして歩み寄ると、遠くからバイクの駆動音が聞こえてくる。

それはマシンビルダーに乗った戦兎だった。

「なんだあ？あのバイクは」

チャラリートをよそに、戦兎は手に持った銃型の武器、ドリルクラッシュャー・ガンモードをオシマイダーに向けて撃つ。銃弾はすべてオシマイダーに当たり、オシマイダーはのけぞつた。

「なっ……」

驚くチャラリートに対して戦兎はマシンビルダーから降りた。そして手に赤い兎の顔があるボトル、ラビットフルボトルを振つた。すると、戦兎は常人とは思えないスピードでチャラリートから龍斗を抱え離れた。

「ウソだろ?!」

「大丈夫か？」

「その力……お前もあいつらに何かされたのか……？それとも仲間なのか？」

「あいつら……？」

「あの、ガスマスクの連中だよ」

助けた龍斗の言葉に、戦兎は驚きの表情を浮かべた。もしかしたら自分と同じく捕まっていた人間ではないかと。

「じゃあ、コウモリ男を見なかつたか？コウモリのデザインがされている黒ずくめの男……」

「おい……こつちを無視して話してんじゃねえ！オシマイダー！やれえ！」

「オシマイダーアア！」

自分を無視して二人だけで話をしている戦兎と龍斗にチャラリ―

トは苛立ちながら、オシマイダーに指示を出した。オシマイダーはそれに従い両腕を振り下ろした。戦兎は龍斗を抱えながらその攻撃をかわした。

そこにはなとさあや、そしてはぐたんを抱いているハリーが工場の陰からその様子を見つけた。

「あれって桐崎くんと…万丈くん!？」

「あの人が万丈くん?」

「おいおいヤバいで!はよ助けにいかんと!」

「行くよ!」

「ええ!」

そう言っではなとさあやはスマホに似たアイテム、“プリハート”を構える。

「ミライクリスタル!!」

二人はそれぞれピンクと青いハートの形をした結晶、“ミライクリスタル”を取り出し、プリハートにセットした。そしてプリハートの下部をスライドさせ、ハート形へと変わった。

「ハート キラッと!」

プリハートを振り、二人はそれぞれピンク色、青色を基調にした衣装に変わっていく。髪の色もそれぞれ変わっていった。

「輝く未来を抱きしめて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!!」

「輝く未来を抱きしめて!みんなを癒す!知恵のプリキュア!!キュアアンジュ!!」

はなは元気のプリキュア、“キュアエール”に、さあやは知恵のプリキュア、“キュアアンジュ”へと変身した。

二人は戦兎たちを攻撃しているオシマイダーに飛び蹴りを放ち、オシマイダーは後ろから倒れた。

「来たな、プリキュア!」

「ここは私たちに任せて!桐崎くんと万丈くんは離れていて!」

「その声もしかして…野々さん!?!じゃあ隣の青い子は、薬師寺さん?」

「えっ?薬師寺!?!」

声で二人の正体に気づいた戦兔。そのうちの1人がさあやと知ると、龍斗は驚く。

「ウソっ!?」発でバレた!?!」

「い、今はオシマイダーが先だよ! エール」

「さつきから無視ばっかしてんじや、ねえ!」

「オシマイダー!」

いきなり正体がバレたことに戸惑うエールを、アンジユが宥める。そんな様子でさつきから無視されてるチャラリートはイライラしながらオシマイダーに攻撃させる。

振り下ろされた腕をエールとアンジユは受け止め、押し返す。

「今のうちに!」

「わかった! ほら行くぞ!」

「お、おう...!」

戦兔は龍斗を連れて工場の物陰に隠れた。そして戦兔はビルドフォンに水色のカメラが描かれてるボトル、カメラフルボトルを差し込んだ。

《《Camera!》》

「マスター、モニターできてる?」

そう言っって戦兔はカメラフルボトルの力で撮影しているビルドフォンを通じて見ている惣呀に聞いた。

『おう、ばっちり映ってるぞ。にしてもあの怪物、オシマイダーとか言ったか? センサーに反応しない辺り、スマッシュとは全く違うな』
「やっぱりか。多分あの怪物を完全に倒せるのは彼女たちだけみたいだな。もつともさつきの攻撃が効いてたあたり絶対って訳じゃないみたいだな...」

プリキュアたちの戦いを分析しながら戦兔は自分の考えを述べていると、万丈は状況についていけず戸惑っていた。

「なんなんだよあれ...なんで薬師寺が...」

「えっ? お前薬師寺さん知ってるの?」

「知ってるもなにも、俺あいつらに捕まるまでは同じクラスメイトだったからな」

「なるほどな。ってことはお前が噂の万丈龍斗ってことか…」

戦兎は龍斗の言葉に納得し、学園で聞いた噂の人物だと理解した。

「なんでお前がオレのこと知ってんだよ?」

「お前ラヴェニールの生徒だろ?俺、今日そこに転校してきたんだよ」

「そうか。ならオレの噂知ってて当然か…」

そう言つて納得した龍斗。その時、空から何かが戦兎たちの後ろに落ちてきた。

それは岩のようなフォルムをした怪人、ストロングスマッシュだつた。

「なんだこいつは…あのデカイのの仲間か!?!」

「違う、こいつはスマッシュだ。人間が怪人になつた姿だ。倒さない限り、何を言つても通じない」

そう言つてると、ストロングスマッシュは戦兎と龍斗に向かって襲いかかる。

それを見たアンジユはすぐに二人の元に向かった。

「桐崎くんたちが危ない!エール、こつちお願い!」

「任せて!」

そう言い交わし、アンジユは戦兎たちの前に出てストロングスマッシュに対峙する。プリハートが青く輝き、アンジユは手を前に突き出す。

「フレフレ!ハート・フェザー!!」

アンジユが突き出した手からハートの形をした青い盾が現れた。ストロングスマッシュの攻撃をそれで防ごうとした。

「フンツ!」

「キヤアツ!」

ストロングスマッシュの重たい一撃の前にハート・フェザーは砕け散り、アンジユはその衝撃で吹き飛ばされた。

「アンジユ!」

「おお!なんかわかんないけどいい感じじゃーん!オシマイダー、今のうちにやっちまえ!」

「オシマイダー!」

アンジュがストロングスマッシュにやられたのを見てエールは驚愕する。その隙についてオシマイダーは腕の爪でエールを持ち上げ投げ飛ばした。

「キャアアアア！」

「エール！」

「はくぎゅく……！」

エールもピンチに陥つてることにハリーとはぐたんも声をあげる。

一方ストロングスマッシュはアンジュに止めを刺そうと拳を振り上げる。

「ッ！」

「薬師寺から離れろお！岩野郎！」

龍斗は意を決してストロングスマッシュの背中に殴りかかる。しかしアンジュでも通じなかった攻撃を生身の人間である龍斗の攻撃では傷ひとつつかなかった。ストロングスマッシュは後ろを振り向き龍斗に拳で振り払った。

「ぐあつ！」

「万丈くん！」

龍斗が吹き飛ばされたのを見たアンジュは悲鳴をあげる。そんな龍斗を見た戦兎はやれやれと言った顔で龍斗の傍に歩み寄る。

「生身でスマッシュに殴りかかるなんて、いい根性してんじやん」

「お前……」

「でもま、ここからは俺に任せろ」

そう言つて戦兎は懐からあるアイテムを取り出した。それは差し込み口らしきものが2つあり、レバーのようなものを取り付けられたドライバー、ビルドドライバーを腰に着けた。するとベルトが戦兎の腰に巻かれた。

「さあ、実験を始めようか！」

そう言つて戦兎はラビットフルボトルと、青い戦車の前面が描かれたボトル、タンクフルボトルを取り出し、振った。

戦兎の周りには、いくつもの数式が現れる。

そして、戦兎はその2本のフルボトルをドライバーの差し込み口に差し込んだ。

《Rabbit!》《Tank!》

《Best Much!!》

ビルドドライバーから電子音が鳴り、戦兎はドライバーの横にあるレバーを回す。するとベルトから管が2本現れ、戦兎の周囲を囲うように出現した。

「なにあれ?!」

「な、なんだありや?!」

「何が起こるんや?!」

エールやチャリートたちも驚きを隠せずにいた。

そして戦兎の周囲に出現した物体、スナツプライドビルダーの前後にはそれぞれ、赤い右側、青い左側の人型の型のようなものが出現した。

《Are you Ready?》

「変身!!」

その掛け声と共に、前後の HALF ボディは戦兎の方へ向かい結合された。

そこには顔に赤いラビットの横顔、青い戦車の側面が左右にあった。

《鋼のムーンサルト! ラビットタンク!! Yeah!》

それが、戦兎が変身する戦士、仮面ライダービルド

ラビットタンクフォームの姿であった。

その姿に、エールたちプリキュアや敵であるチャリート、そして龍斗やハリーたちは驚愕していた。

「勝利の法則は決まった!」

決め台詞を言うと、ビルドR/Tはストロングスマッシュに向かって兎のように飛び上がる。そしてストロングスマッシュの懐に飛び込むとパンチによるラッシュで殴りかかる。

「オラオラオラッ!」

「グオッ!」

ラッシュユシ、ストロングスマッシュユの後ろに回ると、ビルドドライバーから管が現れ、そこからドリルクラッシュヤー・ブレードモードが出現した。ビルドはそれを手に取り、ストロングスマッシュユを切りつける。

「ハッ！なにボサツとしてるんだオシマイダー！お前もやれ！」

「オ、オシマイダー！」

ビルドの登場に唾然としていたチャラリートであったが我に帰り、オシマイダーに攻撃を指示した。

オシマイダーは爪をビルド目掛けて振り下ろした。

「あっ！桐崎くん、危ない！」

「ツ！おっと！」

エールの叫びで、ビルドは気付きオシマイダーの攻撃をドリルクラッシュヤーで受け止めた。そして青い戦車を思わせる右足を踏み込み、次に赤い左足を使い、飛び上がる勢いで押し返した。

「何イ!？」

驚いてるチャラリートをよそに、ビルドはそばで倒れていたキュアアンジユに手を差しのべる。

「大丈夫か？」

「あ、ありがとう…えっと」

「仮面ライダービルド！以後よろしく！」

「ビルド…」

「あの怪人、スマッシュユは俺に任せてくれ。あのオシマイダーとかいう方を頼む」

「わかったわ！」

ビルドに起こされながらアンジユは頷き、エールのもとへ行った。そしてビルドもストロングスマッシュユのほうへ向き直る。

「さて、新しいボトルを試してみるか」

そう言っつてビルドが腰の横にあるボトルホルダーから取り出したのは、昨日戦ったニードルスマッシュユから採取した成分で作られた、ハリネズミフルボトルであった。ラビットフルボトルを抜きそこにハリネズミフルボトルを差し込んだ。

《Harri^ハnezumi^{ネズミ}!》

電子音と共に再びレバーを回すビルド。するとスナツプライドビルダーが出現し、今度は前面に白いハーフボディが形成された。

《Are you Ready?》

「ビルドアップ!」

掛け声と共に前面のハーフボディが結合し、今度は白と青いボディのトライアルフォーム、ハリネズミタンクフォームへと変わった。

「半分色が変わった!?!」

「はぎゅー」

ハリーとはぐたんもその姿に驚く。ビルドはストロングスマッシュが拳を振り下ろそうと接近してくる。

「ほいっと!」

「ウアーッ!」

右手の棘状になった握り拳で殴り付ける。すると握り拳の棘が伸び、いくつもの棘がストロングスマッシュに突き刺さる。

その様子をオシマイダーを相手にしながら目に行っていたエールとアンジユも驚いていた。

「すごい、桐崎くん…いえ、仮面ライダービルド」

「私たちも負けてられないね、アンジユ!」

「ええ!」

ビルドの戦いに圧巻しながらも自分たちは目の前のオシマイダーに向き直る。オシマイダーは両腕の爪でプリキュアたちを倒そうとするが、エールとアンジユは左右にかわし、懐に飛び込み同時にパンチを繰り出しよろけさせた。

「はあっ!」

すかさず、同時にキックを叩き込みオシマイダーを転ばせるエールとアンジユ。そしてエールは両手にポンポンを出現させた。その時、エールのプリハートがピンク色に輝き出す。

「フレフレ!ハート・フォー・ユー!!」

大きなハートピンク色のハートマークを作りだし、それをオシマイダーに向けて放った。オシマイダーはピンク色の光に包まれた。

「ヤメサセテモライマス！」

という言葉と共にオシマイダーは浄化され消滅し、先ほどまで暗かった辺りの空間は本来の色を取り戻すように明るくなった。

「ヤツベー…：リストルさんになんて報告しよう…：」

そんな捨て台詞を吐いてチャラリートは逃げていった。

「やっぱりプリキュアでなら完全に倒せるのか。これはこつちも負けてられないな」

そう言っつてビルドは右手の棘で攻撃をいなしながら、ストロングスマッシュを殴り付けて吹き飛ばす。

「これでフィニッシュだ！」

そう言っつてビルドはハリネズミフルボトルを抜き、再びラビットフルボトルを差し込んで、再びラビットタンクフォームにチェンジした。

《ラビットタンク！Yeah！》

そして再びドライバーのレバーを回し始めた。その様子にストロングスマッシュや周りの者たちも不思議そうに見る。

「ちよつと待ってて」

そう言っつてビルドは後ろに下がり、助走をつけるように左足で地面を蹴り、ジャンプした。すると、ストロングスマッシュの前にグラフを模した滑走路が出現し、X軸を思わせる部分がストロングスマッシュを挟んで拘束した。

ビルドは滑走路に沿うように滑り戦車の履帯を思わせる右足を構えキックの体制のままストロングスマッシュに向かっていく。

《Ready go！ボルテックフィニッシュ！Yeah！》

「ハアアアッ！」

電子音と共に、ビルドはストロングスマッシュに右足のキックを叩き込んだ。

「ハアッー！」

必殺技によりストロングスマッシュは絶叫をあげるように爆発した。

「すげえ…！」

その様子を見ていた龍斗は驚きながらそう言う他なかった。

ビルドは空のボトル、エンプティボトルを取り出し、ストロングスマッシュに向ける。するとストロングスマッシュから粒子が現れ、次々とエンプティボトルに集約された。粒子が全てエンプティボトルに収まると、ストロングスマッシュの姿が1人の男性の姿になっていた。

龍斗は何かを思い出したように男に駆け寄った。

「おい、あんた。ガスマスクの奴らのどこにいたよな？」

「なんの話だよ……どこなんだよ？」

「とぼけんじゃねえよ！」

龍斗の問いにわからないように答える男に、龍斗は胸ぐらを掴む。そしてビルドに向き直って口を開いた。

「本当なんだよ。俺もこのおっさんも体に何かされたんだ」

「お前の話が本当なら……あれはスマッシュの人体実験？」

「なあ。なんの話しとるんや？」

ビルドと龍斗の話にハリーやプリキュアたちも歩み寄って聞く。

「どうして万丈くんが、クライアス社に襲われていたの？」

「それに人体実験って……」

「それは……」

ビルドが話そうとすると、どこからかバイク音が聞こえてきた。その方向を見ると、そこには何台もの黒いバイクに乗った人らしきものたちがいた。

その顔はヘルメットを思わせる形をしていて、体も機械を思わせるものだった。

「あれって……ガーディアン？」

「でもなんか違う……？」

ガーディアンとは難波重工という会社が開発した治安用のアンドロイドである。各都市で配備されている。ちなみに東都で配備されているガーディアンは東都の服を着用しており、機械部分は顔以外隠されている。

目の前にいるガーディアンたちは手に持っているライフルをビルドたちに向けてきた。

〈万丈龍斗ヲ確認。捕獲スル〉

ガーディアンの一団がそう言うのと、他のガーディアンが一齐に発砲を開始した。ビルドやプリキュアたちは龍斗やハリー、はぐたんを抱えて物陰に隠れた。

「えー!?いきなり撃ってきた!」

「お前を狙ってるみたいだな…」

物陰に隠れながらビルドは龍斗を見て言う。

その言葉にみんなの視線が龍斗に集まった。

「あのガーディアンも、例のガスマスクの連中のなのか…?」

「かもな」

「どないすんねん?このままやと蜂の巣やで」

「俺がこいつを連れて奴らを引き寄せる。その際にお前たちは逃げろ」

ビルドはそう言ってビルドフォンにライオンフルボトルを装填し、マシンビルダーに変形させた。

「スマホがバイクに!?!」

「ほら、早く乗れ」

驚くエールと龍斗をよそに、ビルドはマシンビルダーに乗り、龍斗にヘルメットを渡した。

龍斗は一瞬戸惑うが、ビルドはため息をしつつ後部を叩く。

「乗れよ!」

「お、おう…」

「待って!」

ビルドに言われるまま、龍斗はマシンビルダーに乗り、発進しようとするが、そこにエールが声をかけた。

「気をつけてね…桐崎くん」

「…ああ!ありがとう野々さん。いや、キュアエール!」

そう言い返し、ビルドは龍斗を乗せて、ガーディアンたちが気づくようにマシンビルダーを走らせた。

〈ターゲット発見。追跡スル〉

ガーディアンたちもバイクに乗り、ビルドたちを追跡するよえに走

り出す。

「今のうちにワイらも逃げるでー!」

ハリーの言葉でエールとアンジユもビルドが行った道とは逆の方
向で走り出す。

その様子を物陰から見ている人物に気づくことなく。

*

その頃ビルドは、龍斗を後ろに乗せガーディアンたちからマシンビ
ルダーを駆り逃走を続けていた。

「伏せてろー!」

ビルドが後ろにいる龍斗にいうと、左手にドリルクラッシュャー・ガ
ンモードを持ち、後ろから追ってきてるガーディアンたちに向かって
撃つ。

そしてドライバーに装填されているタンクフルボトルを取り出し、
ドリルクラッシュャーのスロットに装填する。

《Ready go!》

「耳も塞いでろ!」

《ボルテックブレイク!!》

ビルドの言葉に、龍斗は右手はビルドに掴まり、片耳を左手で押さ
えた。

重低音の発射音がドリルクラッシュャーから鳴り響き、青い弾丸が何
発か発射されいくつかは地面に当たり、大きな爆発を起こす。

その爆発に巻き込まれたガーディアンたちはバイクから放り投げ
られたり、ひっくり返っていた。

「すげえ……!」

「まっ、ぎつとこんなもん」

ガーディアンたちを巻いたビルドは変身を解除し、戦鬼の姿へと
戻った。

「さて、このままnascitaにお前を連れていく」

「なんで俺を…」

「お前は連中に狙われている。今家に帰せば奴らに捕まるぞ」

そう言って戦兎は *nascita* に向けてマシンビルダーを向ける。

龍斗はその言葉に少しの間黙りこんだ。

「どうしたよ?」

「じゃあ、連絡させてほしい。家に姉貴がいるんだ。たった1人の家族が…俺が無事ってことだけは連絡させてくれ」

「…わかった。でもまずは *nascita* についてからだ。急ぐぞ！」

戦兎の言葉に頷き、再びマシンビルダーの戦兎の後ろに乗った。

「っていうかお前中学生だろ? いいのかよバイク乗って」

「乗るときはほぼ変身してるし、バレないように細心の注意は払ってるよ」

「本当かよ…」

「というかお前、ズボンのチャック全開だぞ」

戦兎の唐突な忠告に、龍斗は自分のズボンを見るとチャックは全開で、中のトランク스가ちらりと…

「いつから気付いてたんだよ!?!」

「割と最初の辺りからだよ」

「なんでもっと早く言わないんだよ! あっ、もしかして薬師寺たちにも…」

「見られてたかもな。っていうか自分で気付けよ馬鹿」

「馬鹿ってなんだよ、馬鹿って!」

そんなやり取りをしながら二人は *nascita* へとマシンビルダーを走らせた。

その姿をスカイウォールの縁から見ている男がいた。それは黒を基調としたボディに、胸と顔にはコウモリの意匠が施されている。そして頭部には煙突のような角が生えていた。この男こそ戦兎が探しているコウモリ男、”ナイトローグ”である。

「戦争の始まりだ…!」

ナイトローグは戦鬼たちの姿を捉えながらそう呟いた。

第2話 輝きのデストロイヤー Part A

—桐崎戦兎と万丈龍斗が謎のガーディアンたちから逃げている頃

「もう1ヶ月になるのか……」

ラヴェニール学園から離れた公園のベンチで、金髪の少女、かがやき輝木ほまれは空を見て呟いた。

「馬鹿龍斗……どこ行つたんだよ……」

「あら？ほまれちゃん？」

空を見ながら龍斗の名を呟くほまれの前に、一人の長い茶髪の女性、万丈香澄が声をかけた。

「あつ……香澄お姉さん」

「こんな所で会うなんて奇遇ね」

「ええ……そうですね」

ほまれの隣に座りながら、香澄は他愛もない会話をする。香澄は初めは明るく振る舞ってはいたが、次第に表情は暗くなっていく。

「龍斗……どこに行つたのかしらね……」

「はい。私も心配です……」

「警察は捜索中だつて言ってるんだけど……」

「あいつ、お姉さんに心配かけて……」

そう言つてほまれは呆れたようにため息をつく。

そんなほまれを見た香澄は微笑みながら言う。

「ふふ、ほまれちゃんだけよ。龍斗のことそう言つてくれるのは」

「ぞ、そんなわけじゃ……」

ほまれは顔を赤らめながら否定するように手を振つたが、香澄はその様子を微笑みながら見る。

「いつか……ほまれちゃんがまたリングで滑る姿が見れること、私も、きっと龍斗も待っているわ」

「……」

香澄のその言葉に、ほまれは沈んだように顔を見せる。

その表情を見て、香澄はベンチから立ち上がる。

「それじゃあ、私は行くわ。もしかしたら龍斗が帰ってくるかもしれないし」

そう言い残し、香澄は歩いて行った。

ほまれは一人項垂れながらベンチに一人残っていた。

「私はもう…跳べませんよ…」

*

その頃――

戦兎は龍斗を *nascita* に連れてきていた。

「なんだここ?」

「俺の居候先の喫茶店、*nascita*」

そう言って戦兎は龍斗を店の中に入れた。

そこにはお客さんが一人もいない店内でコーヒーを淹れている惣呀がいた。

帰って来た戦兎たちを見るなり、よっ!と言って手を振る。

「お帰り戦兎。そっちの彼が例の万丈龍斗か」

「誰だこのおっさん?」

「*nascita* のマスターの石動惣呀さん」

戦兎がそう言って惣呀を紹介すると、惣呀は淹れていたコーヒーのカップを龍斗に差し出す。

「取り敢えずお近づきの印に一杯」

「あっ、どうも。………うっ!」

惣呀からもらったコーヒーを一口飲むと、龍斗はその顔をしかめる。

「なんだよこのコーヒー…不味い!」

「この店にお客さんが一人もいないのは、これが理由」

「道理で……」

店を見渡して客がない理由を、龍斗はようやく理解した。そんな

ことをしていると、戦兎と惣呀は冷蔵庫のほうに歩いていく。

「まあ挨拶はここらへんにして、ついてこい」

「ついてこいつてどこへ？」

「地下だよ。その方がゆっくり話せるからな」

そう言つて惣呀は冷蔵庫の扉を開けた。その先には地下室への道だった。

その光景に龍斗は驚きを隠せずにした。

「すげえ…秘密基地つて感じだな！」

「まあ、確かにな。ほら行くぞ」

そう言つて戦兎は龍斗を連れて地下室へ連れて行った。

*

その頃――

ビルドがガーディアンたちを誘導してくれたおかげで、はなたちプリキュアたちはハリーが住んでいる樹木のある建物まで逃げる事ができた。

「なんとか撒けたようやな…」

「桐崎くん、ビルドのおかげだね」

「は〜ぎゅ〜」

はぐたんを抱きかかえたハリーとさあやは安堵しながら言う。

さあやの言葉に、はなは心配そうな表情を見せる。

「桐崎くんたち大丈夫かな…？」

「お前も見たやろ？あいつなら多分大丈夫やつて」

「でも…」

ハリーが安心させるように言うがそれでもはなの表情は変わらずにいた。

「だったら、会いにいけばいいんじゃないかしら？」

入口の方から聞き覚えのない女性の声が聞こえ、はなたちはすぐにその方向に目を向けた。

そこには眼鏡をかけた大人の女性、増子茉莉の姿があった。

「あ、貴女は…?」

「私は増子茉莉。フリーのジャーナリストよ」

「そ、そのジャーナリストさんが何でここに…?」

よそよそしくハリーは増子に尋ねる。

増子は懐からスマホを取り出して答える。

「そりゃ、噂のヒーローたちを取材するためよ。ね？」

プリキュアのお二人さん」

「!!」

増子の言葉にはなたちは目を見開く。プリキュアの正体は秘密になっっている。

ハリー曰く「ヒーローは正体を隠す方がミステリアスでかっこいいから」であるようなのだが。

「ななな、なんでバレとるんや!」

「さつき変身して戦ってたでしょ。ここに収めてあるんだよね」

そう言っただけ増子は先程工場区でオシマイダーやスマッシュと戦っていた動画を見せる。

そこには自分たちが変身する姿から映っていた。

「さ、最初から全部撮られてる…」

「めちよつく!」

「安心して。今のところは公開するつもりはないわ。貴女たちはあくまでついだったし」

「ほ、ほんまか!」

そう言っただけ増子はスマホを懐に戻した。

その言葉にはなたちは安堵したようにため息を吐く。

そしてはなは先ほど増子が言っていた言葉について尋ねた。

「それより、さつきの会いに行けばいいって…」

「言葉通りの意味よ。私は最近東都で噂になってる”仮面ライダー”を取材してるの。今から彼らがいる場所に行こうと思ってるの。よかったです一緒にこない?」

「ど、どうして私たちを…?」

さあやは戸惑いを持ちながらも増子に疑問を投げ掛ける。なぜ自

分たちを仮面ライダーである戦兎たちのところに連れていこうとするのか。

「仮面ライダーとプリキュア、ジャーナリストとしては両方取材できるとない機会なもの」

「たしかに筋は通ってはいるが…」

「行きます！」

増子の提案に、ハリーは戸惑っていたが、それに答えたのははなであつた。

「はなちゃん」

「桐崎くんたちにお礼言いたいし。同じヒーローとして、話したいことだつてあるし！」

はなのその言葉に、さあやは意を決して頷く。

「ええ。私も彼に助けてもらったもの。お礼が言いたい」

「二人が行くんやったらわいも行くで」

「はぎゅはぎゅ〜！」

さあやに続いて、ハリーも頷き、はぐたんも頷くように笑顔で笑う。

その様子を見ていた増子も自然と笑みを浮かべた。

「話は決まったみたいね。それじゃあ早速行きましょう」

増子はそう言つて入り口を出た。それをはなたちは追うようについていった。

*

―万丈宅―

その頃香澄は家へと足を進めていた。

家の前に見覚えのない車が駐車してあつた。近くには黒服の男たちが立っていた。

「あの…家になにか？」

「万丈香澄さんですね？」

「そうですけど…あなたたちは？」

香澄の問いに男たちは香澄に近づき、スタンガンで気絶させた。

「万丈香澄を確保しました」

『よし、すぐに施設に移送しろ』

「了解しました」

端末から聞こえる加工されているであろう声に従い、男たちは香澄を車に乗せてそのまま走らせていった。